

第 86 話 (67 頁) メンドリと金のたまご

ある農家に、金のたまごをうむメンドリがいました。農家の主が、もっとたくさんのお金を、すぐにほしいと思って、メンドリをころしました（おなかのなかに、金のかたまりがあると思ったからです）。けれども、メンドリは、ほかのメンドリと同じでした。

「だったら、金のたまごのものは、どこから生まれてくるのかな？ 子どもたちは読んだ後で、すぐ、そういう疑問を持つだろうよ。」

「手品のように、何か仕掛けがあるはずだ、と不思議に思った子もいるんじゃないか。」

「この話もイソップに出てくる。手もとの『イソップ寓話集』（中務哲郎訳、岩波文庫）だと、『金の卵を生む鷲鳥（がちょう）』（87 話）という題名で、メンドリはガチョウに替わっているけど、ストーリーは大体同じだ。」

「短い話とはいえ、イソップの方が念が入っている。金の卵を生む鷲鳥はそもそも、神からのごほうびだった、んだって。」

「何の褒美かという、もらった男は、ギリシア神話で富と幸運をもたらすとされるヘルメスを崇拝していたからだ、と説明がある。」

「神さまが登場したら、金の卵の理由も、それなりに納得できるよ。」

「でも、やっぱり非現実的だし、トルストイびいきの我々としては、そうした装飾を凝らしていないアズブカの方に味方したくなるなあ。」（大半がうなずく）

「イソップではごく当たり前の教訓付きで締めくくっている。『このように、業突張（ごうつくばり）はしばしば今以上のものを欲しがって、今あるものも失ってしまうのだ。』と…」

「こういう教訓は改めて言われなくても、読んだだけでわかるさ。」